資料の配置と利用(1)

——逐次刊行物の配架について——

恩 地 宏 和*

図書館における資料の配置と利用は、最も陳腐なようで新しい問題を含み、ごく簡単なようで、むずかしいテーマである。恐らく皆さんも、これについての意見を求められれば、ひとときは「どう考えたらいいのかなあ」と頭をひねられるに相違ない。同様の現象が筆者にも起った。今もってその感去りやらず、ただ漠然と脳裏に去来した雑感を綴って、茶を濁さんとしている。

は じ め に

まず配置について考えるなら、現実に立脚した、特定の条件の下においてでなければ、意味がない。ともすれば理想論にのみ走りがちなわれわれにとって、このことは特に銘記しておくべきである。商品の display とは、どこが違うのだろうか。本質的には変わらないとすれば、図書館の現状は、非常におくれていることになる。利用をぬきにした配置は考えられないが、最も有効な配置という点から見れば、探しにくいところにあるため、あるいは存在することを知らないため使われない「潜在的利用」の開発が必要であろう。そのためには単に、配置法の改善のみでなく、目録カード、表示、図示等あらゆる可能な方法を駆使して、あたらなければならぬ。スペースの点では、利用価値の減少した不用資料も除籍しなければ、経済的で有効適切な配置は望めない。

逐次刊行物の配架

図書館資料には、図書と逐次刊行物に限っても、単行書、製本済の逐次刊行物、新着雑誌、参考図書類、抄録・索引誌等があり、その配置も、実際には、それぞれの図書館のもつ諸条件と特殊性に制約されて、多種多様な

方法が考えられる。従ってここでは、特に医学図書館で重要な位置を占める逐次刊行物（全蔵書に対する利用率は80~90%にも達する）をとりあげ、現在、図書館において最も普遍的で主要な、配置の形態である配架(shelving)に目を向けてみたい。結局与えられた「資料の配置と利用」のテーマを、ここでは特に、開架式を採用している医学図書館における「逐次刊行物の配架と利用」にしばって考えてみたい。

問 題 点

まずこの問題を考えるにあたって、さしあたり次の点を考慮に入れておく必要がある。

“The arrangement of the materials on the shelves should, as far as possible, coincide with the way that readers thought of these materials and the way in which they approached them and used them. This is to say that a journal file should be placed where a reader would tend to look for it rather than at a point where librarians' logic or a librarian's system might otherwise suggest.” (Ralph T. Esterquest¹⁾)

「雑誌の配架の効率化は、利用によるアプローチの容易さを基準として測定される。」(今井義則²⁾)

最も利用しやすい配架法は1つの仮定であり、これは利用者の立場に立って、利用者の便宜のために、理論的に考察しうるだけでなく、実際に正確な数的データとしても算出される可能性があるのだ、という点を頭に入れておくべきであろう。

故にこのテーマは、本来なら「図書館屋」でなく熱心な利用者が、又紙の上ではなく電子計算機にでもかけてはじき出す方が、より実り多い結果をもたらすであろう

* Hirokazu ONCHI, 奈良県立医科大学図書館

ことを、筆者も又確信する。

従来傾向として、図書館業務に関するさまざまなテーマについて、ともすれば最も原則的な点を素通りし、あるいはなおざりにして、本来は第二義的な、あるいは時期尚早であるはずの事柄を持出して、紙面を汚すようなことが見られなかっただろうか。その結果は図書館員の独りよがり、独り合点に終始し、現実はいつまでたっても改善されずもとのまま、という結果に終わってしまう。筆者はここであえて「エエカッウ」することを断念し、「雪中に炭を送る」べく前述のテーマから、筆者が特に関心を持ち、ある程度一般的でかつ具体的であると思われる問題点を3つとり出して、考えてみたいと思う。日頃高度な理論的研究に親しんでおられる先輩諸嬢諸氏には、まことにつまらぬものと見えようが、あえてご容赦をお願いする。

問題点

I 配架は誌名のアルファベット順にするか、あるいは分野別にするのがよいか。

II 抄録・索引誌、逐次刊行物の性格を持つ参考図書類を別置するかどうか。

III 新着雑誌の展示は必要か。

I 配架は誌名のアルファベット順にするか、分野別にするのがよいか。

結論：配架は誌名のアルファベット順がよい。

ハーバード医学図書館の Ralph T. Esterquest は、これに関連して、次のような問題点を提起している¹⁾。

- 1) 配架において、すべての逐次刊行物 (serial) を同等に扱うか、あるいは綜説誌等を別置するか。
- 2) すべての逐次刊行物を、順をおってアルファベット順に配列するかどうか。その際は単なるタイトル順か、タイトルと団体記入 (ALA Rules による) を結び合わせたものにするか。

ハーバード医学図書館では、これらの点について議論百出、結論がつかなかったので、全米の7医学図書館にアンケートを送り、そのうち6つの図書館から解答をえた。結果は次のようである。

A館 World List の order によって、タイトルのABC順に配列する。

B館 全逐次刊行物 (transactions, proceedings, year book, advances 等を含む) は、major word で (前置詞、冠詞は省く) タイトルのアルファベット順に配列する。

C館 逐次刊行物 (transactions, proceedings, annual review, advances を含む) は、純然たるタイトルのアルファベット順配列でよい。全米の50%の図書館は、単純なアルファベット順配列を採用していると思われる。団体記入は用いない。

D館 冠詞、前置詞を無視した純然たるタイトルのアルファベット順配列でよい。

E館 完全なタイトルのアルファベット順でよい。World List of Scientific Periodicals による。

F館 タイトルのアルファベット順配列がよい。前置詞、冠詞は省く。

G館 タイトルのアルファベット順配列。World List を少し変更して適用する。

このように Esterquest の調査では、誌名のアルファベット順による配架がよいという結果がでていいる。ただここでは、serial の中で transactions, proceedings, annual review, advances, yearbook 類を雑誌と同等に扱うかどうか、配架に際しては、タイトルの前置詞、冠詞は無視するか、基準は World List of Scientific Periodicals によるかどうか、といった問題が残るが、結論としては transactions, proceedings, annual review, advances, year book 類をすべて含め、前置詞や冠詞は省いたタイトルの major word によるアルファベット順で、World List of Scientific Periodicals によって配列するのがよいと、Esterquest はいっている。なおこの他にも、誌名のアルファベット順配列がよいという意見は多くみられる。

「誌名のアルファベット順配列以外の方法は、一般的でない……分類配架の見通しは悲観的である。」(今井義則)

「……より単純で明確な配列法として、誌名によるABC順の配列が最も適当であると思われる。」(北村達郎²⁾)

歴史的にみれば、図書館の資料は、分類をほどこされ目録が作成されて、利用の便に供してきた。事実図書館員の側からすれば、単にタイトルのアルファベット順配列よりも、分野別に分類をほどこして配架したい気持が強い。しかし分類配架は、その利点や欠点をあげるまでもなく、現在ではその作業そのものが、不可能に近くなりつつある。Grenzgebiete の雑誌がふえ、同一の雑誌に多くの主題分野をあつかった文献が掲載されるからである。これではたとえ何とか分類したとしても、利用者を極度に混乱させることは必至である。アルファベット

順に配列すれば、確かに journal のところに集中する傾向はあろう、だがともかく接近することは可能である。皮肉なことに、逐次刊行物の配架をとりあげた場合、一定の組織体系から機械的な羅列への「退化現象」が見られる。これは時代の動きとともに、旧来のやり方がついてゆけなくなったための矛盾とも受けとれよう。今後われわれにとっては、いかにしてこれらのギャップを埋め、新しい事態にスピーディに即応していくかが1つの課題となろう。

この問題に関連して、1)日本語雑誌の配架の際、ローマ字化はいずれの方法を採用すべきか。さらに、2)外国語雑誌(日本で発行されるものを含む)と別置すべきか、混配でよいのかという問題が残る。

結論: 1)ローマ字化は、現在採用している方式を明示せよ。2)外国語雑誌と日本語雑誌は、別置する方がよい。

ローマ字化は統一される方が望ましいことは、いうまでもない。しかし実にさまざまな方法が行なわれている現状では、むしろどの方式に統一すべきかということよりもさらに、実際に今どの方式を採用しているかを、はっきりPRすることが肝要である。特に対外的な連絡等の場合には、どこそこの図書館は〇〇式によるということを保つべきをきかせなければ、混乱をひきおこすものになろう。日本語と外国語雑誌の別置が混配かという問題は、それぞれの図書館の規模や特殊性により、一概に論じきれない問題を含んでいるように思われる。例えば混配の利点としては、

「和文・欧文併載誌の増加。

図書館側としては、資料の返納の際の和洋の整理が不要。

利用者はABC順において行くだけの利点。」(松浦正⁴⁾)

があげられている。しかしこれらの点には、いずれも決定的に混配がよいという有力な理由は見あたらない。和・欧文併載誌が全体の雑誌に占める割合は、まだわずかなものであろう。資料の返納の際の整理という点では、規模のそれ程大きくない図書館では、殆んど問題がない。

欧文・和文雑誌の別置という現象は、日本語の特殊性から来る問題である。何に対して特殊なのか。ラテン文字を使用するインド・ゲルマン語族の主要言語に対して。だから医学図書館界の現状では、さしあたり、文字の違いから来る言語的な差異によって、ヨーロッパの言語(ロシア語を除く)、ロシア語(キリル文字使用のス

ラブ語系諸言語を含む)、そして日本語(中国語、朝鮮語ならびにアラビア文字使用の諸言語の雑誌は、数が非常にわずかなので、この際無視して考える)の雑誌を、どのように配架すべきか、ということになろう。

ロシア語はヨーロッパの諸言語と同系統の言葉であるが、使用文字は異なる。日本語は全然別の系統の言葉であり、文字も違う。したがって館員及び利用者が、ロシア語を翻字し、かつ意味をとれる状態の下でならば、混配しても大した支障はないと考える。例えば Журнал→Jurnal→Journal, そうでない場合は、別置すべきである。日本語の雑誌は、ローマ字化に種々の方式がある上、ローマ字に翻訳しても、同系統の言語の場合のように、1つのまとまった単語あるいは概念として、意味を把握できない。(вндю→endo-) letter by letter で追って行くしか方法がない。したがって配架及び探索は非常に煩雑になり、混乱のもとになろう。原則的に日本語と外国語の雑誌を別置すべき理由は充分ある。

「現在の様に、内国雑誌と外国雑誌を大別し、それぞれを一貫してABC順に配列すれば、最も簡単に所要の雑誌を手にすることができる筈である。」(北村達郎)

当館の現状は、誌名のアルファベット順(前置詞、冠詞は無視)に配列し、外国語雑誌は別置し、さらにその中でロシア語雑誌を別に配架している。(原綴のまま)尚、Current 雑誌はサイズ等の関係もあり、かならずしも原則通りには配列されていない。書庫は2層が外国語、1層が日本語の雑誌となっている。

Ⅱ 抄録・索引誌、逐次刊行物の性格をもつ参考図書類を別置するかどうか。

結論: 抄録・索引誌は、最も重要なものだけに限り別置する。逐次刊行物の性格をもつ参考図書類は別置しない。annual review, proceedings 等の綜説誌類は別置しない。

「抄録・索引誌の reference tool としての別置は一般化しているが、年刊のものは回顧と展望を試みている綜説が多く、書架を設けて別置するのが適当である。」(今井義則)

「索引・抄録誌は一般雑誌と同様に扱われている。内容的に異質でも、利用の形態が同じであれば同一扱いでよい。annual review 等の雑誌扱いは、別置の種類をふやすことをさけるため。建築構造上混乱をまねく恐れがある。」(松浦正)

ここでは 1) 抄録・索引誌の別置、2) 参考図書類の

別置, 3) annual review, proceedings 等綜説誌類の別置の3つに大別して考えてみよう。

1) 抄録・索引誌の別置について

抄録・索引誌にはさまざまな種類があるが、内容及び形態的な面からみて、利用のされ方が学術雑誌と異質のものだとは、必ずしも断言できない性格のものもある。それ故それらすべてを機械的に別置することは、かえって利用者に不便をきたすものになる。したがって、広く一般分野をカバーする、最も普遍的で使用頻度の高い、主要なものだけを、閲覧室の一番手近かなところにコーナーを設け別置することが望ましいと思われる。例えば抄録誌 B. A., C. A., E. M., I. M., 医中

索引誌 Q. C. I. M., C. L. M. L., Q. I. M.,

これらの主要な抄録・索引誌は、利用形態が一般の雑誌と異なり、利用頻度も多いため、特に広いスペースと充分な管理が要求される。したがって英文以外のもの、特殊分野の抄録・索引誌 (例えば Dissertation Abstracts 類, Zentralblatt, Research Grants Index 等) は一般雑誌と同じ扱いにする。

2) 逐次刊行物の性格を有する参考図書類の別置について

World of Learning, International Who's Who, 各国の Who's Who, Directory, 年鑑, 研究者名簿, 便覧, 案内, コンテンツ, 統計, 各種データ・ブック類の参考図書は、やはり利用の特殊性からいって、目につきやすい場所にまとめて別置するのがよい。ただし、あまり一般的でないものは、むしろ単行書と同じ扱いをし、分類をほどこして配架する方がよいであろう。各種カタログ類は、パンフレットと同じ扱いで取捨選択し、必要なものを参考図書に準じて別置する。いずれにしても、別置する参考図書類は、あまり数をふやさず、必要なものを厳選して、利用しやすい場所に、まとめて別置するのがよいと思われる。

3) annual review, proceedings 等綜説誌, 議事録等の別置について

review 誌は医学図書館では過去の研究の集大成として特に重要である。又その集積書としての monographic series 等も見のがせない。しかもこれらの資料は、文献探索にも欠かせないものとなっているので、その配架は慎重にしなければならない。review 誌と同じ性格を持つものには、Progress, Fortschritte, Advances, Ergebnisse, Proceedings, Transactions, Berichte, Symposium, Yearbook, Jahrbuch, Comptes rendus, Annals

等があげられるが、これらの資料は、内容及び発行形態が異質であっても、現実に利用者は一般の雑誌とはっきり区別しては考えていない。したがって利用のされ方は雑誌と変わらないので、同様に扱い、同一の場所に配架する。利用者の立場に立ってみた場合、積極的に別置すべき理由は、現時点においては見あたらない。図書館員の側からすれば、別置すべき理由は大いにあるし、事実別置したい気持が強いのであるが、別置すれば混乱をひきおこすものになる。利用者の資料に対する認識が深まり、館員による図書館利用の訓練がよくゆきとどいていならば、こんどは逆に別置する方が有効であろう。review 類を内容から見て雑誌と区別し、別置すべきだという理屈は正しい。だが利用者が review 類の特性を理解せず、それらに対する利用指導がゆきとどいていないところでは、現実的でない。少なくとも現在の大半の医学図書館においては、綜説誌類の別置は、利用者をとまどわす危険がある。

原則として別置は最も重要なものを、最少限にとどめるという立前をつらぬくことが、利用者の資料への容易なアプローチにつながる鍵であると信じる。

Ⅲ 新着雑誌の展示は必要か。

結論：展示の必要はない。

「新着雑誌の展示が利用効率をどのように高めるか、質的な関連性はなかなかとらえ難い。

新着雑誌を展示書架に配架する理由。表紙の面を展示し、利用者の関心をひくことで利用効率を高めるため。利用効率を高めると考えられるのは、利用者の範囲が広く、不確定で contents sheets などによるニュースの伝達が徹底しない条件の下においてである。」(今井義則)

「新着未製本雑誌の配置は、(阪大では展示机、雑誌棚を設置)、1) 直探関係ある分野の情報、動向のキャッチ、2) 関連分野の情報に目を通すため。」(松浦正)

ここでいう新着雑誌の展示とは、新しい雑誌が図書館に到着してから3日ないし数日間、閲覧室の最も目につきやすい場所に並び、その間貸出を禁じ最新の情報を提供する扱いをさす。

さてここでは、このような方法が一体有効なのかどうか考えてみたい。一般に新着雑誌は screening に利用される。その場合、1) 純粹に browsing 的な性格を持つものと、2) ある特定の雑誌に限定、集中する場合が考えられる。利用形態としてはこのうち 2) の場合がより

(p. 268 へ続く)

(p. 258 より続く)

きて、その実行にあたってあいまいになってしまう恐れがあるし、余り細かすぎると、種々状況の変化に応じて図書館の態度を変えてゆく順応性という面で不便である。従って適当な程度の細かさというものが必要である。

しかも資料利用面のポリシー 1 つ取ってみても、利用対象はどうするか、どの範囲の資料を利用させるか、館外貸出を認めるかどうか、回覧雑誌のサービスを行なうかどうか、と言った全般的な事柄についてのポリシーから、何冊一度に貸すか、期間はどれだけにするか、といったような細い事柄についてのポリシーもある。

こゝで細かいレベルのポリシーはスタッフ・マニュアルなどを作って、これに明記した方が便利であるが、より一般的な事柄についてのポリシーは、まとめて成文化する必要があろう。

文 献

- 1) Statement of service to library users. ACRL news no. 2, 21~22, April 1966.
- 2) Guideline for medical school libraries. Journal of

Medical Education. 40 (1) : 5~64, 1965.

- 3) 国立大学協会 大学の研究・教育に対する図書館の在り方とその改革について. (第 1 次報告) 国立大学協会, 1965.
- 4) Brodman, E.: The challenge in medical school libraries. Journal of Medical Education. 40 (1) : 1~4, 1965.
- 5) Bloomquist, H.: Readers' service, pt. 2. circulation; document reproduction. In Handbook of medical library practice. ed. by G. L. Annan & J. W. Felter 3d ed., Chicago, Medical Library Association, 1970, pp. 177~197.

* * *

(p. 262 より続く)

重要で、頻度も多いと思われる。利用の効率化は、研究者が通常必ず目を通すことに決めている一定数の雑誌がおくれることなく、定まった場所にきちんとありさえすれば、そこなわれることはない。この意味で、新着雑誌の展示は、図書館員がそれにはらう労力の割には、効果が期待できないのではあるまいか。

しかし現実にはこれを実施している図書館も、かなりあるようだ。そうした努力には敬服するが、1) 展示期間が比較的短かい (研究者は図書館へ日参するとはかぎらない)、2) 単なるスクリーニングなら、コンテンツ・シートか Current Contents による、3) browsing なら最低発行後 1 年~2 年以内のものを網羅していなければ意味がない。「雑誌文献は発行後 1 年を経過した後の 1 年間に利用頻度が最大になる」(今井)、4) 特に中小規模の図書館では、「利用者が固定的、少数で情報が徹底している」(今井) ため効果が期待できない。

ま と め

医学図書館における逐次刊行物の配架と利用について考察した。

- 1) 配架は誌名のアルファベット順が妥当である。
- 2) 抄録・索引誌類は、最も主要なものを別置する。
- 3) 新着雑誌の展示は必要ない。

本稿はただ逐次刊行物の配架を、アルファベット順か、分野別かの観点から眺めたにすぎない。筆者はただこれだけですべてを割りきるつもりはもうとうないことを、最後におこわりしておく。

参考・引用文献

- 1) Ralph T. Esterquest: Shelving medical serials for reader convenience: title vs. corporate entry. Bull. Med. Libr. Assn. 48.(2) : 175~83, 1960.
- 2) 今井 義則: 逐次刊行物の配置 (1), 医学図書館 12 (1) : 28~33, 1965.
- 3) 北村 達郎: 逐次刊行物の配置 (2), 医学図書館 12 (1) : 34~36, 1965.
- 4) 松浦 正: 逐次刊行物の配置 (3), 医学図書館 12 (1) : 37~41, 1965.